

ランチョンセミナー 11 (LS11)

5月12日(日) 第2会場 11:45-12:35

## SHD 診療における心エコー図検査の役割

座長：大倉 宏之 (岐阜大学大学院医学系研究科 循環病態学)

共催：GE ヘルスケア・ジャパン株式会社

---

### LS11 SHD 診療における心エコー図検査の役割

大西 哲存

兵庫県立姫路循環器病センター 循環器内科

SHD は structural heart disease の略語で心臓大血管の構造的疾患を意味する。

SHD という言葉は主にカテーテル治療の対象となる疾患に対し用いられ、2014 年には日本循環器学会から「先天性心疾患、SHD に対するカテーテル治療のガイドライン」が発表された。

以前から本邦でも、僧帽弁狭窄症に対する経皮的経静脈的僧帽弁交連切開術 (PTMC) や閉塞性肥大型心筋症に対する経皮的中隔心筋焼灼術 (PTSMA) などのカテーテル治療は行われていたが、近年、大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル的大動脈弁留置術 (TAVI) や僧帽弁閉鎖不全症に対する MitraClip™を用いた経皮的僧帽弁接合不全修復システムが導入され、SHD 診療がより日常的に行われるようになってきている。

この流れを受け日本心エコー図学会では 2013 年に SHD 認証医制度を設け、SHD 診療のための心エコー図専門医養成とカテーテル治療の成績向上を目指している。新しい分野であるため、実際に心エコー図が SHD 診療にどれほど寄与しているかは、各施設間にばらつきがあるようにも見受けられる。

本セミナーでは当院で施行された SHD 診療において、心エコー図をどのように使用しているかを提示・供覧し、その役割を解説する。今後、本邦においてもさらに広がりを見せるであろう SHD 診療において、より役立つ心エコー図検査が施行される助けになれば幸いである。